

幸津國生先生略歴

略歴

学歴

- 1966 東京大学文学部一類（倫理学）卒業
- 1968 同大学院人文科学研究科修士課程（同）修了（文学修士取得）
- 1972 同博士課程（同）単位取得退学
- 1978－1985 （ドイツ）ボーフム大学ヘーゲル・アルヒーフ留学
- 1985 同大学哲学・教育学・出版学部（哲学）卒業（Dr.phil.取得）

職歴

- 1972－1977 都留文科大学勤務（専任講師をへて助教授）
所属：文学部初等教育学科（社会科教室）
- 1978－1980 （ドイツ）アレキサンダー・フォン・フンボルト財団奨学研究員
- 1989－2012 日本女子大学勤務（助教授をへて教授）
所属：文学部社会福祉学科・大学院文学研究科社会福祉学専攻をへて人間社会学部・大学院人間社会研究科開設に伴い同学部社会福祉学科・同研究科社会福祉学専攻
委員会等分担：一般教育委員長、学科長、大学院専攻主任、大学評議員・自己点検教学委員、その他各種委員会委員
海外研修：1996－1997; 2004－2005（ドイツ）ボーフム大学ヘーゲル・アルヒーフ
学生サークル活動アドバイザー：西生田茶道部

所属学会

- 日本ヘーゲル学会（〔前・ヘーゲル研究会〕1997－1999 運営委員（事務局担当）; 2005－2009 理事・研究奨励賞選考委員）
- 日本倫理学会（1993－1994 常任評議員・日本学術会議哲学研究連絡委員会委員）
- 日本哲学会

社会活動

- 2003－2012 日本女子大学生涯学習センター（西生田）公開講座「午後のサロン」開催
（講義担当。林香里氏（ピアノ演奏担当）と共催）〔2004－2005 海外研修時を除いて〕15期（各期14ないし15回）

<業績一覧>

著書

Das Bedürfnis der Philosophie. Ein Überblick über die Entwicklung des Begriffskomplexes “Bedürfnis”, “Trieb”, “Streben” und “Begierde” bei Hegel. [=Hegel-Studien. Beiheft 30] Bonn 1988

『哲学の欲求—ヘーゲルの「欲求の哲学」—』弘文堂 1991

『現代社会と哲学の欲求—いま人間として生きることと人権の思想—』弘文堂 1996

Bewußtsein und Wissenschaft. Zu Hegels Nürnberger Systemkonzeption. [=Hegeliana. Band 10] Frankfurt am Main/Berlin/Bern/New York/Paris/Wien 1999

『意識と学—ニュルンベルク時代ヘーゲルの体系構想—』以文社 1999

『「君死にたまふことなかれ」と『きけ わだつみのこえ』・「無言館」—近代日本の戦争における個人と国家との関係をめぐって—』文芸社 2001

『時代小説の人間像—藤沢周平と共に歩く—』花伝社 2002

『茶道と日常生活の美学—「自由」「平等」「同胞の精神」の一つの形—』花伝社 2003

『『たそがれ清兵衛』の人間像—藤沢周平・山田洋次の作品世界—』花伝社 2004

『ドイツ人女性たちの<誠実>—ナチ体制下ベルリン・ローゼンシュトラッセの静かなる抗議—』花伝社 2005

『『隠し剣鬼の爪』の人間像—藤沢周平・山田洋次の作品世界2—』花伝社 2006

Bewusstsein, Idee und Realität im System Hegels. [=Hegeliana. Band 20] Frankfurt am Main/Berlin/Bern/Bruxells/New York/Oxford/Wien 2007

『一般人にとっての『般若心経』—変化する世界と空の立場—』花伝社 2007

『哲学の欲求と意識・理念・実在—ヘーゲルの体系構想—』知泉書館 2008

『古典落語の人間像—古今亭志ん朝の噺を読む—』花伝社 2008

『『武士の一分』・イチローの人間像—藤沢周平・山田洋次の作品世界3+「サムライ野球」—』花伝社 2009

『『冬のソナタ』の人間像—愛と運命—』花伝社 2010

『『宮廷女官チャングムの誓い』の人間像—人間としての女性と歴史—』花伝社 2011

編書

『ヘーゲル事典』弘文堂（共編）1992

論文

「ヘーゲルにおける欲望の概念」『倫理学年報』日本倫理学会 20（1971）, 103-118

「ヘーゲルにおける意識の主体性の問題—『精神現象学』に即して—」『倫理学年報』23（1974）, 73-86

「ヘーゲルにおける人間性の問題」『倫理学年報』25（1976）, 101-115

「初期ヘーゲルにおける『生』の論理—『愛による運命との宥和』を中心に—」『都留文科大学研究紀要』12

(1976), 1-25

Der Standpunkt der Leere im Hinblick auf das Prinzip der Praxis. In: Philosophisches Jahrbuch. 92. Jahrgang 1985. 2.Halbband. 386-395

Zur Chronologie von Hegels Nürnberger Fassungen des Selbstbewußtseinskapitels. In: Hegel-Studien. 21 (1986), 27-64

「現代における共同生活の欲求について—『いじめ』から『やさしさ』へ—」『季刊 思想と現代』白石書店 8 (1987春), 150-165

「ニュルンベルク時代ギムナジウム講義に於けるヘーゲル論理学の客観性の章のクロノロジーに寄せて」『倫理学年報』36 (1987), 87-104

「人間としての子どもの成長・形成と授業—斎藤喜博『教育学のすすめ』に学ぶ—」『事実と創造』一莖書房 76 (1987.9), 22-29

「現代における哲学の欲求について」『理想』理想社 640 (1988秋), 100-111

「体系期精神哲学の形成—ニュルンベルク時代ギムナジウム講義における精神論草案のクロノロジーによせて—」、城塚登/濱井修編『ヘーゲル社会思想と現代』東京大学出版会 1989, 83-98

「司馬江漢の人間観」『社会福祉』日本女子大学社会福祉学科 30 (1989), 43-55

「ヘーゲルのニュルンベルク時代ギムナジウム講義における自己意識の章草案のクロノロジーによせて」『日本女子大学紀要 文学部』39 (1990), 91-120

「哲学と社会福祉との関係について」『社会福祉』日本女子大学社会福祉学科 31 (1990), 27-40

「授業の展開と子どもの人間形成」『人間研究』日本女子大学教育学会 26 (1990), 27-43

「文献学をめぐって—ヘーゲル研究、とりわけニュルンベルク時代のギムナジウム講義研究を例として—」『日本女子大学紀要 人間社会学部』1 (1991), 129-142

「洋学について」『社会福祉』日本女子大学社会福祉学科 32 (1991), 57-64

「人間として生きること、あるいは内的自由について」『社会福祉』日本女子大学社会福祉学科 33 (1992), 74-92

「ヘーゲルの『学の体系』における精神現象学と論理学との関係について—ニュルンベルク時代のギムナジウム講義を顧慮して—」『日本女子大学紀要 人間社会学部』3 (1993), 341-354

「人倫と道徳性—主観的自由の意味をめぐって—」、門脇卓爾編『叢書 ドイツ観念論との対話 第4巻 知と行為』ミネルヴァ書房 1993, 167-189

「いま人間として生きることの意味について—『世界人権宣言』を顧慮して—」『社会福祉』日本女子大学社会福祉学科 34 (1993), 64-85

「ヘーゲルの論理学における客観的論理学—主観的論理学という区分の出自について—ニュルンベルク時代のギムナジウム講義を顧慮して—」『日本女子大学紀要 人間社会学部』4 (1994), 177-186

「平和の主体について—イマヌエル・カント—アンネ・フランク—リヒャルト・フォン・ヴァイツェッカー—」『社会福祉』日本女子大学社会福祉学科 35 (1994), 64-85

「ヘーゲルのニュルンベルク時代ギムナジウム講義における論理学の篇別構成の変化について」『日本女子大学紀要 人間社会学部』5 (1995), 189-204

「二〇世紀の人権思想—平和的生存権をめぐって—」、一番ヶ瀬康子編『二一世紀社会福祉学』有斐閣 1995, 173-188

「言語における人間の尊厳と自由—フンボルト言語哲学を手がかりに—」『社会福祉』日本女子大学社会福祉学科 36 (1995), 142-149

- 「後期ヘーゲルの『学の体系』構想形成における自己意識の章の役割について」『日本女子大学紀要 人間社会学部』6 (1996), 71-85
- 「後期ヘーゲルの『学の体系』における意識の位置づけ—その方法的意味—」『理想』660 (1997), 51-61
- 「時代小説の時間感覚と人間像—藤沢周平の作品を手がかりに—」『社会福祉』日本女子大学社会福祉学科 38 (1997), 1-30
- 「後期ヘーゲルの『学の体系』構想における意識の『決意』と論理的なものの『弁証法的側面』との関係について」『日本女子大学紀要 人間社会学部』8 (1998), 175-189
- 「茶道と日常生活の美学—『自由』・『平等』・『同胞の精神』の一つの形—」『社会福祉』日本女子大学社会福祉学科 39 (1998), 3-41
- 「後期ヘーゲルの『学の体系』構想における意識の方法的意味の成立について」『日本女子大学紀要 人間社会学部』9 (1999), 227-244
- 「意識と学—ニュルンベルク時代における後期ヘーゲルの『学の体系』構想の形成—」加藤尚武編『ヘーゲル哲学への新視角』創文社 1999, 77-101
- 「実践の原理に関する空の立場」『社会福祉』日本女子大学社会福祉学科 40 (1999), 70-80
- 「学の次元、とりわけ『絶対的理念』における意識の止揚—ヘーゲルのニュルンベルク時代ギムナジウム講義における後期体系構想への発展史の一局面をめぐって—」『日本女子大学紀要 人間社会学部』10 (2000), 147-165
- 「『君死にたまふことなかれ』と『きけ わだつみのこえ』・『無言館』—近代日本の戦争における個人と国家との関係をめぐって—」『社会福祉』日本女子大学社会福祉学科 41 (2000), 23-67
- 「ヘーゲルの体系構想における意識の位置付け—イェナ時代からニュルンベルク時代への発展史—」『日本女子大学紀要 人間社会学部』11 (2001), 73-100
- 「時代小説における人間の探求—藤沢周平の作品を手がかりに—」『社会福祉』日本女子大学社会福祉学科 42 (2001), 15-60
- 「意識と絶対的理念—ニュルンベルク時代ヘーゲルの体系構想における方法の問題—」『日本女子大学紀要 人間社会学部』12 (2002), 25-64
- 「歴史物語としての『愚管抄』—実践の原理をめぐって—」『社会福祉』日本女子大学社会福祉学科 43 (2002), 11-26
- 「後期ヘーゲルの体系構想における論理学と実在哲学との関係について—ニュルンベルク時代ギムナジウム講義を手がかりに—」『日本女子大学紀要 人間社会学部』13 (2003), 73-100
- 「『たそがれ清兵衛』の人間像—藤沢周平・山田洋次の作品世界—」『社会福祉』日本女子大学社会福祉学科 44 (2003), 85-120
- 「後期ヘーゲルの体系構想における理念から自然への移行について—発展史的視点のもとでのその体系的意味をめぐって—」『日本女子大学紀要 人間社会学部』14 (2004), 77-89
- 「ヘーゲル哲学の今日的意味を考える—意識・理念・実在をめぐって—」『哲学会誌』弘前大学哲学会, XXXXIX (2004), 23-33
- 「『隠し剣鬼の爪』の人間像—藤沢周平・山田洋次の作品世界2—」『社会福祉』日本女子大学社会福祉学科 46 (2005), 109-151
- 「『般若心経』における空の立場—「色即是空 空即是色」—」『社会福祉』日本女子大学社会福祉学科 47 (2006), 15-44

- 「古典落語の人間像—『芝浜』を手がかりに—」『社会福祉』日本女子大学社会福祉学科 48 (2007), 125-145
- 「『武士の一分』の人間像—藤沢周平・山田洋次の作品世界3—」『社会福祉』日本女子大学社会福祉学科 49 (2008), 39-57
- 「『冬のソナタ』の人間像—愛と運命—」『社会福祉』日本女子大学社会福祉学科 50 (2009), 27-44
- 「ニュルンベルク時代ヘーゲルの体系構想における意識・理念・実在」、久保陽一編『ヘーゲル体系の見直し』理想社 2010, 119-137
- 「『宮廷女官チャングムの誓い』の人間像—人間としての女性と歴史—」『社会福祉』日本女子大学社会福祉学科 51 (2010), 89-119
- 「藤沢周平の作品世界における＜貢献＞する態度の描写」、加藤尚武/関根清三編『「貢献する気持ち」共同研究』ホモコントリビューエンス研究所 2011

その他（翻訳、書評、事辞典項目、研究情報、学会活動、口頭発表・講演）

〔翻訳〕

- レオポルド・センゴール「社会主義はヒューマニズムである」、エーリッヒ・フロム編『社会主義ヒューマニズム』城塚登監訳、紀伊国屋書店 1967, 上 73-90
- ミハイロ・マルコヴィッチ「ヒューマニズムと弁証法」同上, 上 109-122
- 「編者まえがき」「あとがき」、J.シュライフシュタイン他編『マルクス主義とフランクフルト学派』城塚登監訳、青木書店 1974, III-IV; 223-231
- H.L. パーソンズ「生態学、技術および平和にかんするマルクス主義の立場」『思想』岩波書店 607 (1975.1), 122-138
- 同「人間の実現」『ヒューマニズムとマルクス思想』古田光監訳、合同出版 1978, 38-80

〔書評〕

- Rezension: H. Waldenfels: Absolutes Nichts. In: Bochumer Jahrbuch zur Ostasienforschung.* 8 (1985), 475-483
- 「歴史における実践の基礎付けへの問い—加藤尚武『哲学の使命 ヘーゲル哲学の精神と世界』によせて—」『人間研究』日本女子大学心理・教育学会 31 (1995), 19-23

〔事辞典項目〕

- 「関心」・「衝動」・「情熱」・「精神」・「絶対(的)精神」・「努力」・「欲求・欲望」『ヘーゲル事典』1992, 81-82; 234-235; 236-237; 280-284; 295; 369; 507-509
- 「欲求」、星野勉/三嶋輝夫/関根清三編『倫理想辞典』山川出版社 1997, 250-253

〔研究情報〕

- 「金子武蔵とヘーゲル研究」、金子伝太郎編『追想 金子武蔵』（非売品）1989, 213-215
- 「『精神現象学』と論理学」、加藤尚武編『ヘーゲル『精神現象学』入門[新版]』有斐閣 1996, 81-82
- 「ヘーゲル研究国際共通語としてのドイツ語」『ヘーゲル哲学研究』ヘーゲル研究会[現・日本ヘーゲル学会]、

[前篇]3 (1997), 109-115; [後篇] 4 (1998), 54-60

「ニュルンベルク・ギムナジウムにおける講義とそれに関する草稿と筆記録」、加藤尚武編『ヘーゲル哲学への新視角』創文社 1999, 14-18

「ベルリン大学」、加藤尚武責任編集『哲学の歴史 第7巻 理性の劇場[18—19世紀]』中央公論社新社 2007, 350-354

[学会活動]

Hegel-Forschung. Zusammenfassungen der auf japanisch geschriebenen Aufsätze. (「ヘーゲル研究 日本語論文ドイツ語レジュメ集」ヘーゲル研究会) 編集 1990

日本倫理学会編『いま「人間」とは一人間観の再検討—』慶應通信 1995 ([大会共通課題設定委員・シンポジウム司会者]日本倫理学会第45回大会、於：日本女子大学西生田キャンパス 1994.10.15-16)

『日独哲学シンポジウム『精神現象学200年』』第一セッション・シンポジウム「精神現象学の理念」司会 於：法政大学 2006.3.25

[口頭発表・講演] (2000以降の主なものののみ)

「ヘーゲルの体系構想における意識の位置付け—イエナ時代からニュルンベルク時代への発展史—」ヘーゲル研究会シンポジウム『イエナ時代ヘーゲルの体系構想』 於：明治大学 2000.6.25

「意識と絶対的理念—ニュルンベルク時代ヘーゲルの体系構想における方法の問題—」京都ヘーゲル読書会例会 於：芝蘭会館（京都市）2001.7.1

「「君死にたまふことなかれ」と『きけ わだつみのこえ』・「無言館」—近代日本の戦争における個人と国家との関係をめぐって—」上田哲学サロン例会講演 於：上田市公民館（長野県上田市）2002.3.31

「ヘーゲル哲学の今日的意味を考える」弘前大学哲学会大会における公開講演 於：弘前大学（青森県弘前市）2003.9.27

Bewusstsein, Idee und Realität in Hegels Nürnberger Systemkonzeption. In: Wie ist Hegels System? 国際シンポジウム『ヘーゲルの体系の見直し』 於：駒沢大学 2009.3.4-6 [フィンク社より刊行の予定]